REF 談話会（2019 年 3 月 22 日）

「マヤ・アステカ文明の地を訪ねて」

萬匠　東亜男

はじめに

きっかけとしての「銃・病原菌・鉄」2000　ジャレド・ダイアモンド　草思社

(１)　表題、目次　<テオティワカン遺跡「太陽のピラミッド」写真>

１．メキシコの概要

(２)　メキシコの概要　<メキシコ全図及び国旗、国章図>

正式名称	メキシコ合衆国（Estados Unidos Mexicanos ／ The United Mexican States） 31 の州と 1 つの連邦直轄地（メキシコシティー）からなる
国名の由来	現地ガイドの説明によると「アステカの人々は自らをナワトル語で『メーシィカァ』と呼んだ、ただし語尾が「a」は女性形となるので、男性形の「o」で終わる『「メシコ（メヒコ)』になった。」 なお、自らを「メーシィカァ」あるいは「メシカ」と呼んだのはアステカ人の一派。 国名の由来について Wikipedia では異なる説明をしている。
国旗・国章	国旗　緑は「民族の運命における国民の希望」 白は「カトリックや宗教的な純粋さ」 赤は「国に殉じた愛国者の血」
	国　国章の「湖の中央の岩に生えるサボテンに蛇をくわえた鷲がとまっている」図は、アステカ神話にあった「そこに都市を創設せよ」という予言を示している。
人口（2016）	128,632 千人（世界第 10 位）／日本：126,324 千人（第 11 位）　(*)
人種構成	メスティーソ；約 60 %／先住民；約 30 %／スペイン系白人；約 9 % 表の下に記した日系メキシコ人の数は現地ガイドの説明による ー人種の定義もパーセンテージもあいまい（次の宗教も同じ）ー
宗教	ローマ・カトリック；82.7 %／プロテスタント；9 %／その他；5 % ブラジルに次いで、世界で二番目にカトリック人口が多い。 先住民の信仰と融合したカトリック、シンクレティズムについては次の(3)で
国内総生産（2014）	1,294,695 百万＄（世界 15 位)、一人当たり 10,326 ＄（世界平均 10,743 ＄）(*)
国土面積	1,964 千㎢（日本の約 5 倍）(*)
道路延長（2013） 自動車保有台数	378,923km（日本 1,218,830km）(*)　単位面積当たり日本の 1 ／ 17 35,890 千台（日本 77,188 千台）　(*)
大統領	エンリケ・ペーニャ・ニエト（日本での表記は「ペニャニエト」） （任期は 6 年間、2018 年 11 月 30 日まで、 1 期のみで再選不可）
通貨	ペソ（＄で表記）　（参考：1 M$＝¥6.62 円　2016/1/12） 為替レートの推移については後ほど(4)で

(*)世界国勢図会 2016/2017 による

・日本は 1897 年（明治 30 年）に移民を送り、現在は 3,000 家族、 1 万人前後が住んでいる。(「新版日本史年表」1984 歴史学研究会編、岩波書店によると「1987/5/18　『榎本植民地』移民 34 名、目的地

であるチアパス州エスキントラに到着」とある。)、榎本とは当時の外務大臣榎本武揚

(3) 先住民の信仰と融合したカトリック（シンクレティズム）

<グアダルーペの聖母マリア像及びフランシスコ会修道院聖堂の前にある十字架（写真）>

・グアダルーペの聖母マリア像

1531 年 12 月 9 日、グアダルーペの先住民ホアン・ディエゴ（列聖された）の元に聖母マリアが出現、「ティルマに描かれた褐色のマリア像」はその証左とされる。聖母マリアが褐色であることに留意。カトリックの三大奇跡。

聖母マリアが出現したのはテペヤクの丘、トナンツィンの女神で先住民に知られた地である。

Wikipedia の記述は現地ガイドの話とほぼ一致している。

・ウエホツィンゴのフランシスコ会修道院（世界遺産）聖堂の前にある十字架（写真）は、マヤの神の一つ蛇をデザインしている。もともとマヤには別の意の十字架があり、マヤの十字架とカトリックの十字架が融合した存在と見られる。

パレンケには十字架の神殿がある。マヤの十字架は基本方位（東西南北）を表すシンボル。

(4) メキシコペソ、為替レートの変動（図）

・2016 年 1 月 12 日、yahoo finance 為替レート、1 ペソ（M$）= 6.62 円
2016 年 1 月 13 日、成田空港両替所為替レート、1 ペソ（M$）= 8.59 円、1$ = 120.3 円
2016 年 1 月 14 日、ホテル内両替所為替レート、100 ペソ（M$）= 6.04$ = 727 円
2017 年 3 月 20 日 23:30　yahoo finance 為替レート、1 ペソ（M$）= 5.91 円

2．メキシコの歴史　別紙 1 参照

(5) コロンブスの航海　<コロンブス肖像画及びグアナハニ島上陸画>

・コロンブス：スペイン語表記はコロン。先スペイン期は先コロン期とも。
・第 1 回航海で 1492 年にサンサルバトル島（先住民語、グアナハニ島）に上陸。先住民から金を強制調達。その後、キューバ、サント・ドミンゴ島（現ドミニカ共和国、ハイチ共和国）に到達。
・1498 年からの第 3 回航海で現在のコロンビアにある河川（オリノコ川）に至り、河川水が真水であったことから大陸の可能性があることに気付くも、それがヨーロッパ人には未知の大陸とは思わなかったらしい。このためアメリカ大陸の名は、その後調査をしたアメリゴ・ベスプッチによることとなった。
コロンブスの名が残るのはコロンビアのみ。
・16 世紀初頭、スペインはキューバ、サント・ドミンゴ島に植民地開発拠点都市を建設。先住民は戦闘、逃亡、天然痘の蔓延によりカリブ海域では絶滅。この後、カリブ海域ではサトウキビ生産のため黒人奴隷が輸入されることとなった。

(6) コロンブスの出会った国　<コロンブスの航海地図>

(7) エルナン・コルテスの遠征（1519 年）　<エルナン・コルテスの遠征ルート図及びマリンチェ画>

・キューバ総督は 1517 年、1518 年二度に渡り探検隊をユカタン半島に派遣し、一度は先住民に敗れ、二度目は海岸でアステカの廷臣から献上品を贈られるとともに厚くもてなされ帰還。二度の派遣でキューバ総督は山を越えた先に眩い財宝に輝く地があることを確信した。
・エルナン・コルテスの軍団は当時マヤの宗教・商業センターであったコスメル島（ユカタン半島北東岸）に上陸し、マヤ部族に囚われの身となってマヤ語を話せるようになっていた修道士ヘロニモ・デ・アギラールを救出した。
・コルテスはキューバ総督の承認を得ないまま 550 人の軍人を連れて出航、ユカタン半島の付け根タバスコの海岸に到着、そこでの先住民との戦闘に勝利した。敗れたタバスコの首長は服従の証として黄金の装飾品などとともに一団の女性を差し出した。その中にナワトル語とマヤ語を話せるマリンチェがいた。

現地ガイドの話：マリンチェはアステカの一首長の娘、後妻に男の子が生まれたためマヤ族に奴隷とし

て売られ、聡明なマリンチェはマヤ語を取得した。
・ヘロニモ・デ・アギラールとマリンチェを得たことで、二重通訳によりアステカ族との会話が可能となった。
・さらに西進し、センポアラに上陸、ベラクルスに駐屯地を築いたうえで内陸に入り、アステカ王国に敵対し、従属していなかった勇猛なトラシュカラ族と交戦。彼らに勝利して同盟を結んだ。勇猛なトラシュカラ族が敗戦したのは、メソアメリカにおける戦争の方法、目的がスペインと異なることが大きい。
・チョロリヤン（現チョルーラ）がアステカの要請で待ち伏せ攻撃をすることを事前に察知したコルテスは、トラシュカラとともに逆襲し、打ちのめしてテノチティトランに乗り込んだ。
・テノチティトランが最終的に崩壊するのは 1521 年。
(8) メキシコ独立の戦い　<メキシコ紙幣に描かれたイダルゴ及びモレーロス神父>
・スペイン本国のブルボン王朝が終焉し、副王政権の正統性がなくなる。
・1810 年 9 月 16 日、ミゲル・イダルゴ神父の「悪しき政府を倒せ！ガチュピン（スペイン人への侮蔑語）がフランス人に引き渡そうとしている祖国を守れ！」（諸説がある）、最後に「メキシコ人よ、メキシコ万歳！」で締めくくった「ドロレスの叫び」が発端になった。
・イダルゴ神父は、先住民、メスティーソとともにグアダルーペ聖母マリア像を旗印に行進、途中の各都市を陥落させて首都に近づくも、白人の反感を買い副王政府軍に敗れ、異端審問所での審理の結果、異端と反逆の罪で有罪となり処刑される。
・1813 年、ホセ・マリア・モレーロス神父がイダルゴに代わって反乱軍を組織、独立宣言をして新政府の樹立を目指すも、王制派の軍隊に敗れ、1515 年処刑される。
・1821 年 2 月 24 日、王党派のクリオーリョ（ヌエバ・エスパーニャ生まれの白人）であるイトゥビルデが副王領の独立を宣言する「イグアラ計画」を発表、イトゥルビデと副王との間でイグアラ綱領を確認するコルドバ条約が結ばれ、メキシコの独立が決まった。
(9) 米墨戦争で領土の 3 分の 1 を失う　<メキシコが失った領土図>
・映画「ワン・マンズ・ヒーロー」は米墨戦争が舞台。
・1835 ～ 1836 年、テキサス独立戦争（映画「アラモの砦」はテキサス独立戦争が舞台）、1829 年、メキシコは黒人奴隷制を廃止、奴隷制を必要としたテキサスのスペイン系メキシコ人による独立闘争。メキシコ軍が頼りにしたサンタ・アナ将軍敗戦、テキサス独立。
・1845 年、米墨戦争はアメリカ合衆国によるテキサス共和国併合がきっかけ、アメリカが宣戦布告。

3．メソアメリカの古代文明

(10) メソアメリカの範囲　<メソアメリカの範囲図>
メソアメリカにおける諸文化の共通性
・二元性……中国思想における陰陽に通ずる。
　－全てのものは対立的でありながら相互に補い合い、そのバランス上に事象が成立している。
　－男性／女性、太陽／月、昼／夜、天上界／地下界、１３／９、乾燥／湿潤、火／風
・多神教……ピラミッドの最上段には都市（部族）ごとの守護神を祀る神殿があった。
　－数多く存在する神々はそれぞれに何らかの属性を有していた。
　－メシーカ：ウィツィロポチトリ（＝太陽と戦いの神）、マヤ：チャーク（＝雨の神）
　－人身供犠（太陽の復活という神話に由来する人身供犠）、放血儀礼、花の戦争（捕虜の確保）
・宇宙観……メソアメリカ人が思い描いた世界のイメージ
　－平面的には東西南北の四角形、立体的には天界＝地上界＝地下界
　－天界は９層＋４層の１３層、地下界は９層、その間に人間の住む地上界がある。
・植物と食材……世界に広がった「メソアメリカ・ブランド」
　－トウモロコシ（玉蜀黍）文化（現在まで続くトルティーリャ）

– フリホル豆（隠元豆）、サツマイモ、トマト、カボチャ、カカオ、トウガラシ、綿
・暦、天文学……農耕の開始時期、宗教儀礼の日取りを決め、王権を正当化する政治的道具
– 260 日暦と 360 日暦を併用、52 年で循環。長期暦（5126 年余、2012 年 12 月 21 日に一巡）
– ゼロの文字を人類史上最初に使用。20 進法
・文字と書物……文字を持たなかったアンデス文明とは対照的、石碑に刻まれ、書物も作られた。
– 動物の皮や樹皮、紙の一種アマーテに書かれた絵文書の多くはカトリック宣教師により「悪魔の書」として焼却処分された。（ユカタン州、ディエゴ・デ・ランダ神父）
– マヤ文字は漢字仮名交じりの日本語とよく似ている。

(11) メソアメリカ古代文明遺跡図（マヤ地域を除く）　＜同名図＞

(12) メソアメリカ古代文明表　　＜同名表＞　別紙 2 参照

・インターネット上にあった「とってもわかりやすいと評判の『メソアメリカ古代文明表』2000/11/29 S.FUJITA」を改変していている。
・「トラコパヤ」はおそらくメキシコシティ南東部、「クイクルコ」はショチミルコ湖の西岸、ヒトレ火山の爆発により消滅。

(13) メキシコ国立人類学博物館（１）　＜国立人類学博物館正面、中庭及び「太陽の石」写真＞

・Museo Nacional de Antropologia
・位置：メキシコシティー国際空港から 18.5km、約 30 分、チャプルテペック公園内にある。
　チャプルテペック公園：マクシミリアン皇帝の居城チャプルテペック城があった。マクシミリアン皇帝はレフォルマ通りをシャンゼリゼ通りに似せて造らせた。
・1825 年、メキシコ政府は国立博物館を建設する法令を定め、先スペイン期の遺物の収集を初め、140 年後の 1964 年に至って開館した。
・メキシコを代表する考古学的遺物や先スペイン期の芸術工芸品を始めとし、（２階には）現代に生きる先住民の日常生活や儀式に関する資料が展示されている。
　レプリカもあるが発掘された実物も多く展示されている。
　アステカ室は一番奥にあり、同室にある「太陽の石」は宛も神社のご神体の如し。
・１階全ての展示室を見るためには１日は必要。

(14) メキシコ国立人類学博物館（２）　＜１階平面図＞

(15) メキシコ国立人類学博物館（３）　＜１階展示物より「巨石人頭像」ほか写真＞

・メキシコ湾岸（オルメカ文明）、巨石人頭像高さ 3m、重さ 20t になるものもあるという。
「サン・ロレンソ」、「ラ・ベンダ」両方にある。
・ユカタン半島（マヤ）、パレンケ王朝第 11 代パカル王、翡翠のモザイク仮面（実物）
マヤ中部低地西側に位置する。石棺の蓋は「マヤの宇宙飛行士」のレリーフ（フェイク）で有名。
・メキシコ中央高原（テオティワカン）、羽毛の生えた蛇神殿（レプリカ）

(16) テオティワカン遺跡（１）　＜「月のピラミッド」から見た「死者の大通り」写真＞

・メキシコシティの北東、約 50km（道路距離）に位置する。
・メキシコ中央高原において BC150 年から AD550 年に栄えた都市国家。
（日本は弥生時代中期～古墳時代後期、６世紀半ば仏教公伝）
・最盛期には都市面積は 2000ha 以上に広がり、その人口は 12 万人から 20 万人に達した。
・AD200 年頃までに綿密な都市計画のもとで建設された。
・「死者の大通り」の延長は 3,316m、幅員は 40 ～ 60 m。
3,316m は、およそ福井市明里橋から北へ武道館を過ぎた次の信号までの距離。

(17) テオティワカン遺跡（２）　＜テオティワカン中心部の概略図＞

・テオティワカン中心部の概略図は「日経サイエンス」2014 年 11 月号「血と石の神々」より
・「死者の大通り」沿いにあっては比較的よくわかっている建造物は立体的に描いている。

「羽毛のある蛇の神殿」北側に死者の大通りを横断する川（サン・ファン川）は付け替えたものらしい。テオティワカンが位置する所は、東西と北の三方が山に囲まれ河川が集まる農業に適した場所。そのうち小高くて農業に適しない場所にテオティワカンが建設されたのではないだろうか。

(18) テオティワカン遺跡（３）　<太陽のピラミッド頂部から見た風景写真>

・太陽のピラミッドについて、前記の「血と石の神々」では「今、私たちが目の前にしているテオティワカンは、その本格的な調査発掘と修復の成果であって、しかし当時の姿がそのまま保存、再現されているわけではないらしい。例えば太陽のピラミッドは４層だったが今は 5 層に再現され、最上段にあったとされる神殿はない。それでもテオティワカンは考古学上の１級の遺跡であり、メキシコ中央高原観光のハイライトであることは間違いない。」と記している。

・「メキシコの歴史」に記した 1877 年に大統領に就任した後、独裁体制を築いたポリフィリオ・ディアスが本格的な調査発掘と修復を指示し「独立 100 年を記念」したとしている書があった。

・愛知県立大学の杉山三郎氏の測量調査によると、「テオティワカンの長さの基本単位は約 83cm である。」としている（出典：講談社選書メチエ「古代メソアメリカ文明」2007 青山和夫）

・太陽のピラミッドは底辺 224m（0.83 × 270 = 224.1）、高さ 64m（0.83 × 77=63.91）、248 階段。太陽のピラミッドから「羽毛の生えた蛇の神殿」を目指したが、時間がなく途中で断念。

・右上写真の手前の白い屋根はシティオ・テオティワカン博物館、死者の大通り先端左側が「羽毛の生えた蛇の神殿」

・左下写真は、月のピラミッド（高さ 44m）と背後の山の頂きが重なっている状況を撮影、「図説アステカ文明」2004 リチャード・F. タウンゼント著、創元社では「セル・ゴルド山（ナワトル語ではテナンすなわち『母なる石』と」呼ばれた）を都市の基軸に据えている」としている。

(19) テオティワカン遺跡（４）　<アパートメント・コンパウンド図>

・「アパートメント・コンパウンド」図は、インターネット上にあった「Wide Urban World」の「Living the good life in Teotihuacan」by Michael E. Smith より

・AD200 年頃から都市住民は「アパートメント・コンパウンド」と呼ばれる集合住宅に居住した。

・アパートメント・コンパウンドは、祭祀や生産の場で持つ複合的建造物。

左図はアパートメント・コンパウンド群、右図はアパートメント・コンパウンド群のうちの一つで、左図右上に記されている「Zacuala」の鳥瞰図。

・前述の「古代メソアメリカ文明」では、「2,300 ほどのアパート式住居に住んだ。（中略）大小さまざまなアパート式住居があったが、平均して 60 ～ 100 人が居住し、共同で日常生活や儀式を営んだ。」としている。

(20) テオティワカン遺跡（５）　<アパートメント・コンパウンド図及びテオティワカンの位置図>

・右図はアパートメント・コンパウンドの一つ、(19)左図中ほどに記されている「TETITLA」の平面図

・テオティワカンの衰退と放棄

AD6 世紀後半から 7 世紀半ばまでに衰退、放棄され、忘れ去られた。衰退の要因は諸説あり、究明されていない。

①各地に都市が生まれ、交易ルートが遮断された　②内紛説　などがある。

・誰が建設し、何語が話されていたかは謎のまま。

・14 世紀、アステカの遠征隊が再発見、「テオティワカン」はナワトル語で「神々の生まれた場所」という意味。「死者の大通り」などは彼らが名付けたもの。

発見後、アステカ王国の高官、神官の避暑地として利用された。

・アステカ滅亡後、再び眠りにつき、19 世紀末から発掘、修復が始まった。

(21) マヤ文明（概要）　<マヤ遺跡位置図二葉>

・マヤ文明は究極の石器の都市文明。

・統一された王国はなかったが、地域的な従属関係はあった。

・サクベ（舗装堤道）が都市内外に張り巡らされ、地域内及び周辺地域との交流を通して発展し、変化し続けた。

サクベはユカタン語で「白い道」を意味する。大きめの石や土を盛り、小石や漆喰で舗装した道。コバー遺跡とヤシュナ遺跡を結ぶサクベは延長 100km、平均幅 4.5m。高さ 0.5m ～ 2.5m。

・文字、暦、天文学が発達し、文字の数は 4 万～ 5 万あり解読が進んでいる。ゼロの文字を史上最初に使用した。

・自然環境：起伏が激しく湿潤なマヤ南部高地：カミナルフユ

大部分が熱帯雨林のマヤ中部低地：コパン、ティカル、ヤシュチラン、パレンケ

半乾燥地帯のマヤ北部低地　　：カバフ、ウシュマル、チチェン・イツァ、マヤパン

(22) マヤ文明（プウク地方の遺跡）　<プウク地方地図及びタブー・タブレロ説明図>

・プウク（ユカテカ語）地方＝ユカタン半島西部の丘陵地帯

高低差は 100m 以上あり、マヤ低地北部で最も肥沃な土壌だが、セノーテがない。

恐竜を絶滅に至らしめた隕石の影響範囲にはセノーテがないらしい。だが真偽は確かではない。

ウシュマルにはセノーテがあるのでプウク地方にセノーテがないこととは別の問題か？

・多くの都市が近接し、サクベで結ばれている。

・プウク式建造物は丹念に仕上げられた切石で積まれ、外壁は入り組んで優美な装飾が特徴的。

・訪問遺跡：マヤパン（後古典期後期）、カバフ（古典期後期）、ウシュマル（古典期後期・終末期）

プウク地方の遺跡巡りにはプウク街道、修道院街道を通るかと思っていたら、全く新しいバイパスが造られていた。

プウク地方地図中のアシエンダとは入植したスペイン人が設けた大農場。入植したスペイン人はマヤ人には土地所有の概念がないことにつけこんで土地を我が物にし、マヤ人を大農場で使役、収奪した。

・ピラミッドの型式：タルー・タブレロ、テオティワカンの台頭によりメソアメリカ全域に広がった。

タルー・タブレロ（Talud-tablero）はメソアメリカ全体で見られるピラミッドの形。現時点ではテオティワカン以前にはないとされている。

(23) マヤパン遺跡（１）　<マヤパン遺跡入口付近から見た全景写真ほか>

・Mayapan は「マヤ人の旗」を意味する。

・壁に囲まれた約 4 ㎢ の広さに約 4 千の構造物があり、最盛期の人口は 12,000 人と推定されている。

・英語とスペイン語による遺跡を説明したボードが備えられていた。説明文最後の「albarradas」はスペイン語で「壁」の意だが、元々はマヤ語かも知れない。

【英語の説明ボード文】

Mayapan

The walled city of Mayapan was founded during the second half of the eighth century and covers an area of 4 square kilometers. Containing approximately 4,000 structures. Mayapan reached a population of 12,000 inhabitants. Its name means "Banner of the Mayans".

During the postclassic period(1200-1441A.d.), Mayapan was considered the most important center of mayan civilization ; thus it was frequently cited in Mayan literature as well as in Spanish sources. During the postclassic period, this great Mayan capital reached great splendor and exercised dominion over northeastern and central northern provinces of the Yucatan Peninsula.

The majesty of this site is evidenced by great buildings such as "Kukulcan's Castle" ; constructive influences from Chichen Itza are apparent, although building proportions in Mayapan are smaller (as in the case of the Castle).

In the central plaza, buildings served civic, administrate and religious purposes, as well as providing residences for the site's governing class. These buildings were constructed over foundations with corridors and columns. They formed temples whose interiors had altars toward the back and benches to the sides.

Smaller shrines and round-shaped buildings, know as observatories, are also representative of this site's architecture.

Mayapan's residential zone is mainly concentrated in the southeastern section of the civic center. Patios of dwellings are bordered by walls locally know as albarradas or "defensive walls".

・1441 年にウシュマル出身の名門シウ家の反乱により破壊されたとされる。

説明文中４行目、「the postclassic period(1200-1441A.d.)」、後古典期は 1000 年から 16 世紀とするのが一般的で、特に 1441 年としているのはマヤパンの滅亡した年を誤って記載してしまったものと思われる。

(24) マヤパン遺跡（２）　＜エル・カスティーヨ写真＞

・中心部の「エル・カスティーヨ」は高さ 15 メートル、上ることが出来る。

・「INAH」はメキシコ国立人類学歴史学研究所。

「古代アメリカ文明－アステカ・マヤ・インカ－文明」2010 増田義郎・青山和夫、山川出版社では「メキシコ国立人類学歴史学研究所によって過度に修復されている。」と述べている。

前ページの壁画はエル・カスティーヨ両脇の茅屋の中にある。（石積みが崩壊していたため壁画が保全されたともいえる。）

(25) カバフ遺跡（１）　＜カバフ遺跡構造物配置図及び大宮殿写真＞

・説明文によると「カバフの最盛期は A.D.700 ～ 1,000 年、約 4 平方 km に 10,000 人以上が居住。」

【英語の説明ボード文】

Kabah

The ancient city of Kabah is located in the Puuc region in Yucatan which is characterized by the presence of small hills and fertile grounds for agricultural production.

In the Puuc the Maya managed to produce excellent mixtures of lime which used for the construction of majestic buildings. Delicate stone works decorating their facades are typical for the Puuc architecture, as well as one of its most recurrent motives ; the depictions of the God Chaac.

Kabah had been occupied since 600 before the Common Era(Late Preclassic Period), however, its period of splendor occurred between 700 and 1,000 Common Era(Terminal Classic Period). For almost 1,600 years the city was being constantly transformed until it reached its final form. The city has three groups, although it has been calculated that its total extension covered some 4 km^2. In this area there were a couple of compounds of modest dimensions and innumerable houses with thatched roofs providing housing for a population that reached up to 10,000 inhabitants.

The east Group is the only one that may be visited. It was the residence of the ruling family during the Terminal Classic Period and also the place to exercise political and religious power.

Among its main buildings are the Codz Pop, the Palace and the Teocalli.

A Sakbe, or causeway, with a length of about 20km connected Kabah to the cities of Nohpat and Uxmal.

Dear visitors, Kabah is part of a nature reserve that has made possible the regeneration of its ecological system. This is why you can enjoy not only the archaeological site, but also its vegetation, animals, and birds. Help us to maintain it by following the instructions that you will find on the route.

"In Yucatan Maya

・見取図的な構造物配置図が設置されていたが、現地では判読不能。

・現在、観ることが出来るのはそのうち政治、宗教上の支配者が居住していた東のグループのみ。

・東のグループ入口正面の大宮殿と修復されたように見える持ち送り式のアーチ、アーチ上は階段。

(26) カバフ遺跡（２）　＜チュルトゥン、コッツ・ポップほか写真＞

・仮面の宮殿（コッツ・ポップ－ Codz Pop －）を飾るウィッツのうち、最上段右端のウィッツのみ鼻が輪になっている。これが正式な形で、その他のウィッツは悉く鼻が折れている。

「チュルトゥン」は水溜機能がなくなった後は、ゴミ捨て場あるいは死体置き場になった。

・ウシュマルからノフマットを経由してカバフに到る、延長約 20　km のサクベの終点となる地にある持ち送り式のアーチ門は、森の中にあって、見に行くことはできなかった。

現地ガイドに聞いてみたが「アーチ門があるだけです。」と案内してくれる気配は全くなかった。

(27) ウシュマル遺跡（１）　<推奨ルートを示した案内板写真>

・1996 年に「古代都市ウシュマル」として世界遺産に登録されている。

・説明ボード（おそらくマヤ語と思われるボードもあり）によれば、BC500 年頃から定住が始まり、AD ９世紀に至ってプウク地方の政治、経済の中心となった。

・37.5 平方 km の範囲に約 25,000 人が居住した。

・世界遺産につき施設の配置と推奨のルートを示した案内板がある。建造物の写真は入れ替え、建造物名称のスペイン語は日本語に改変している。

【英語の説明ボード文】

Uxmal

Uxmal is located in the Santa Elena Valley to the south of the Puuc hill country in the southwestern part of the Yucatan Peninsula. The zone was first settled in 500B.C., but it wasn't until the ninth and twelfth centuries A.D. that it became the seat of Mayan political and economic power in the Puuc region.

It is estimated that a population of around twenty-five thousand inhabitants was distributed throughout a territory of 37.5square kilometers with enormous agricultural potential, but lacking in permanent water sources. For this reason the Mayas constructed chultunes, or underground cisterns, and a complex drinking water system, including aguadas and bukteoobob for the utilization of rainwater.

The architecture at this site is one of the most authentic examples of the Puuk style. Decorative features such as the three-dimensional masks of the God Chaac, colonnades, the two-headed jaguar, and other iconographic symbols demonstrate Uxmal's position in the most important cultural and commercial circuits of the Maya Classic Era.

The walled civic-administrative area occupies an area of one kilometer from north to south and 0.6 kilometer from east to west. The palace-type structures are arranged around courtyards, forming quadrangles. The decoration is among the richest and most varied of all the archaeological zones, including representations of gods, animals, dignitaries, and geometric forms. There are also residential structures in the surrounding area.

説明文中７行目の「aguadas　and　bukteoobob」は英和辞書にはなく、スペイン語翻訳サイトでも見つけられなかった。

(28) ウシュマル遺跡（２）　<尼僧院写真>

・「尼僧院」を始めとし「魔術師のピラミッド」、「総督の館」などはスペイン人が名付けたもの。尼僧院は王宮、総督の館は「ポポル・ナフ（ユカテカ語で会議所の意）」であったと考えられている。

・尼僧院は幾何学紋様、蛇、ウィツ（山）など、モザイク石彫りで装飾されたプウク様式建築の傑作。

(29) ウシュマル遺跡（３）　<魔術師のピラミッド及びグラン・ピラミッドからの展望写真>

・「魔術師のピラミッド」はウシュマル最大の神殿ピラミッド（高さ 35m、底辺 85 × 50m）、少なくとも４回は増改築された。

・周辺は立ち入り禁止で上ることは出来ない。

・「金剛インコ」の神殿がある高さ 30m の「グラン・ピラミッド」は上ることが出来る。

遺跡の外に目を向けると青々とした樹林が広がっている。現地ガイドに「王はここから焼き畑をする場所を指示していたのでは？」と質問すると「段々畑がありましたから」との答。しかし、青山和夫氏は「プウク地方には段々畑の痕跡が見られない。」と記している。

(30) チチェン・イツァ遺跡（１）　<チチェン・イツァ遺跡配置図及びサクベ写真>

・世界遺産、ククルカンの光臨が見られることで世界で最も有名なマヤ文明の遺跡
・８世紀から都市化が進み、古典期後期・終末期のマヤ北部低地で最大の広域王国の首都として栄えた。
・少なくとも 30 平方 km の都市域を持ち、人口は 35,000 人を超えた。
・チチェン・イツァとは、ユカタン語で「イツァ人の泉のほとり」の意味。
・都市中心部からメソアメリカ最多の 90 以上のサクベが放射状に通っていた。

チチェン・イツァは国際リゾート都市カンクンから 120km、観光公園として整備されている。カンクン国際空港には米国の 50 に余る都市との間に航空路線があり、特にマイアミからは 2 時間弱。日本人の新婚旅行の行き先としても人気があるらしい。チチェン・イツァのエントランスは人で溢れ賑わっていた。米国からの観光客が最も多いと見られるが、チリやアルゼンチンから訪れる人も多いのではないかと思う。

(31) チチェン・イツァ遺跡（２）　＜エル・カスティーヨ写真＞
・「エル・カスティーヨ」、別名「ククルカン・ピラミッド」は高さ 30m、底辺 60m、チチェン・イツァ最大の神殿ピラミッド。
・3 月 21 日前後には風と豊穣の神ククルカン（羽毛の生えた蛇神）の降臨が見られることで有名。
・基壇 4 面にそれぞれ 91 段、神殿に 1 段の階段があり、91 × 4 + 1 = 365 段、太陽暦の 1 年の日数としている。
・周辺は立ち入り禁止

目の前にあるピラミッドは修復・復元されて 365 段の階段があるようだが、1000 年前にあった通り復元されたものではないと、修復前の写真を示しながら現地ガイドは確信ありげに説明された。地盤も今よりは低く、また基壇上の神殿への階段は４段あったという。現地ガイドの説明が全て正確とは限らないし、根拠がどこにあるのかは知らないが、現地に来なければ聞けない話ではある。

右下の写真は、次の多柱回廊「千本柱の間」階段上の「戦士の神殿」に置かれている「チャック・モール」（「旅名人ブックス　メキシコ古代遺跡とカンクン－歴史と癒し、探求の旅」2006 日経 BP 企画より）

(32) チチェン・イツァ遺跡（３）　＜大球技場及び千本柱の間ほか写真＞
・メソアメリカ最大の「大球技場」を含めて、マヤ地域最多の 13 の球技場がある。

リングまでの高さは 7m、幅は 70m、長さは 168m。ガイド氏によると、この大きさの球技場では１チームの競技者数は７～８人、中までゴムで詰まったかなり重いボールを使うとても大変な球技らしい。肘から先の手は使えないというからリングを通すことはほぼ奇跡と言ってもいい。リングを通さなくても相手側のゴールまでボールを運べば勝敗が決したたらしい。かなりサッカーに近い。サッカーの起源はメソアメリカにあると、メキシコは主張してもいいのではないかと思った。
・「勝ったチームのキャプテンが生け贄になった。」というのは俗信で間違い。重要な祭礼では稀に負けチームから、あるいは戦争捕虜が人身供犠にされることはあった。

左下の写真は 2005 年 4 月に撮影された「球技場下段の壁にある人身供犠のレリーフ」（写真の出所は「www.geocities.jp/pasadena_life/041005.html」）、現在は摩耗、風化して判然としない。

(33) マヤの暦と数字　＜焚書を免れたマヤの絵文書及び石碑写真＞　別紙３参照

写真右の２行２列目の文字に注目、文字の下側に丸点が４つと縦棒が１本刻まれている。これはマヤの数字で９を表す。長期暦を示す石彫りではないかと見た。

４．メキシコの都市

・人口百万人以上の都市
① メキシコシティ、首都、政府直轄地、市域人口 8,875 千人、郊外を含む人口 19,494 千人(2003 年)
② グアダハラ、ハリスコ州の州都、郊外を含む人口 4,737 千人、マリアッチ発祥の地
③ モンテレイ、ヌエバ・レオン州の州都、郊外を含む人口 4,415 千人、アメリカ合衆国国境に近い。
④ プエブラ、中心地プエブラ・デ・サラゴサは州都、プエブラ－トラスカラ都市圏の人口 2,921 千人
⑤ トルカ、中心地トルカ・デ・レルドはメヒコ州（メキシコ州）の州都、郊外を含む人口 2,153 千人

メキシコシティの郊外を含む人口を除く人口は何れも 2014 年データ。
以下、ティファナ、レオン、フアレス、ケレタロ、サンルイスポトシ、メリダ、メヒカリ
アグアスカリエンテス

(34) メキシコシティ（１） ＜現在のメキシコシティ鳥瞰図に 16 世紀の湖岸線を入れた想像図ほか＞

・メキシコシティはメキシコ合衆国の首都、政府直轄地であり、行政上の正式名称は連邦区（Distrito Fe-deral、D.F.)。D.F.（デ・エフェ）と呼ばれる。アステカ王国のかつての首都テノチティトラン。
・D.F.中心部のほとんどはテツココ湖（塩湖）の埋め立て地。

左の図は「地図で訪ねる歴史の舞台－世界－」2003 帝国書院より

(35) メキシコシティ（２） ＜「テツココ湖西岸から見たテノチティトラン」画ほか＞

・メキシコ国立人類学博物館、アステカ室に展示されているコバルビアス画の「テツココ湖西岸から見たテノチティトラン」。
・アステカ王国の実態はテノチティトランとトラコパン及び東岸のテスココとの三国同盟であった。
・手前からの道はトラコパンからテノチティトラン祭祀センターに到る堤道と見られる。そこから少し離れた左側に今は「三文化広場」となっている「トラテロルコ」の祭祀センターが描かれている。

「トラテロルコ」の祭祀センターがあった地は現在「三文化広場」となっている。その広場にある碑文には「1521 年 8 月 13 日／クワウテモック王によって英雄的に守られてきた／トラテロルコはエルナン・コルテスの手に落ちた／それは勝利でもなければ、敗北でもなく／メスティーソ国民の痛ましい誕生であった／それが今日のメキシコである」と刻まれている。そして、メキシコ・オリンピックが開催された 1968 年、学生デモに政府軍が発砲し多数の死者を出したトラテロルコ事件の舞台となった痛ましい場所でもある。

(36) メキシコシティ（３） ＜メキシコシティ中心部地図＞

・メキシコシティは地下鉄が大部分をカバーしている。2015 年現在、12 路線、総延長は 226.5 km、195 駅あり、料金は全区間均一（5 ペソ)。
・メキシコシティ中心部図中、駅名が記されているのは全て地下鉄の駅名。右上のソカロ駅がある路線は「２号線」、イダルゴ駅で直交する路線は「３号線」で、南下するとメキシコ国立自治大学に至る。
・D.F.は交通渋滞が激しいにもかかわらず、現地ガイドの説明によると「市民の自家用車所有の願望は強く、車の所有者は地下鉄には乗らない。自家用車を持てないものだけが地下鉄に乗る」らしい。
・D.F.が盆地の底に位置するという地形から、排気ガスによるスモッグが常態化しているという（たまたま私たちが訪れた日は、乾季にもかかわらず雨が降り、翌日は晴れ上がって青空が広がっていた)。
・メキシコは世界で 11 番目（2013 年データ）の石油産出国であるが、石油精製工場がなくガソリンはアメリカから購入している。このためガソリンは日本並みに高く、政府の公害対策と相まってハイブリット車の人気が高いらしい。

(37) メキシコシティ（４） ＜メトロポリタン大聖堂及びテンプロ・マヨール写真＞

・1978 年電気工事のため掘削中に偶然、アステカの神話にかかわる直径 3.26m の円形石彫を見つけた。それにはアステカの神話にある首と手足を切り離された月の女神コヨルシヤウキが彫られていた。円形石彫の発見をきっかけにメキシコ政府がその周辺を発掘調査し、遺跡はテノチティトランの中央大神殿であることが判明、その周囲を発堀・修復する一大プロジェクトが実施され、発掘された貴重な遺物は大神殿博物館に展示されている。
・メキシコでは中央広場は「ソカロ」と呼ばれている。「憲法広場」が正式名称らしい。毎年、独立記念日（9 月 16 日）の前日の夜、ソカロに集まった市民を前にして大統領が「ドローレスの叫び」を演ずる。内容は大統領によって変わるが、最後は「メキシコ人よ、メキシコ万歳！」で締めくくられる。
・Wikipedia の「メキシコ」の項目では、憲法について 408 回にのぼる世界最多の改正が行われているとある。ただし最初の憲法が何時のものであるかは記されていない。スペイン・ブルボン王朝の崩壊（1808 年）以降メキシコの独立にいたる時代、さらに独立後の混乱の中でアパチンガン憲法（1814)、メキシコ合衆国憲法（1824)、1857 年憲法、1917 年憲法が制定されている。

(38) メキシコ国立自治大学（UNAM）　<中央図書館及び学長棟の壁画写真>

– Universidad Nacional Autonoma de Mexico –

・メキシコ国立自治大学はラテンアメリカ最大の大学、学生数は 30 万人、文系の学生は UNAM に限らず国立大学は学費が無料という説明があったが真偽の程は確かではない。

・UNAM の中央メインキャンパスは要請がない限り警察も立ち入れない大学都市（シウダ・ウニベルシタリア– Ciudad Universitaria –）であり、世界遺産（文化遺産）に登録されている。また、一部の建築物はメキシコ壁画運動を代表する作品としても知られている。

・1968 年のメキシコシティ・オリンピックのメイン会場、エスタディオ・オリンピコ・ウニベルシタリオもこの大学都市の中にあり、正面は壁画で飾られている。

・中央図書館の壁画は世界最大と言われ、アステカ人とスペイン人をモチーフに四面が飾られている（フアン・オゴルマン– Juan O'Gorman –作）。

壁画は真ん中にアステカのピラミッドと教会を配し、その上に鷲が二羽の鷲が蛇に似せた紐を咥えている図が描かれ、紐の片方にはテノチィテトランが崩壊した「1521」の数字が、一方にはヌエバ・エスパーニャ副王領が崩壊した「1820」が記されている。最下部には、右にはアステカを征服したコンキスタドールが槍や旗を手に馬に跨がる姿が、左には十字架を手にした宣教師の一群が描かれ、そのことは歴史上の事実として忘れてはならないと警鐘を鳴らしているようでもある。その上には左右に「PTOLOMEO（天動説）」と「COPERNICO（地動説）」を表すデザイン、さらに様々な人物像を描いてメキシコ人の起源がアステカ・マヤ等の先住民とスペイン人にあるようなことを主張しているように思えた。壁画というから色を塗ったものかと思い、どのようにして描いたのかも不思議だった。ガイドの説明を聞いて、近づいてよく見ると一定の大きさのパネルに、例えて言えば山下清画伯のちぎり絵のように色彩のある細かい石を貼り付け、そのパネルを壁材として何枚も精確に組み合わせて一つの大きなキャンパスにしているものであった。

・学長塔の壁画は、ダビット・アルファロ・シケイロス– David Alfaro Siqueiros –作。「民衆から大学へ、大学から民衆へ」と名付けられている。

・メキシコ国立自治大学のこれらの壁画は、1920 年代、メキシコ革命下でのメキシコ壁画運動の結実であり、メキシコ壁画運動は日本にも影響を及ぼしている。

・「芸術は爆発だ！」の言で知られる岡本太郎画伯は、学長棟の壁画制作者シケイロスと交流があり、お互いに影響を及ぼし合い、大阪万博のシンボル「太陽の塔」はアステカ文明の影響を受けているという。

(39) 道路みたまま　<メヒコ=プエブラ高速道路及び制限速度 110km/h の対面道路写真>

プエブラへの道は、メキシコシティ内の渋滞を除けば快適である。渋滞区間を出ると地下鉄が地表に現れて、道路の中央を併走する「メヒコ=プエブラ高速道路」に入り、一方、高速 3 車線の脇には緑地帯と緩速 2 車線があって商店が並んでいる。2 ヶ所ほど料金所があったが、それ以外は自由に出入り出来るザル有料のよう。市街地を離れるといつの間にか鉄道がなくなり、緩速車線もなくなって、約 1 時間弱で山地部に入っていった。程なく峠らしき所を越えトイレ休憩。高速道路の全景を撮るのにもってこいの横断歩道橋が設けられている。階段を上って、遠くを見ると驚いたことに高速道路車線脇を歩いている人がいる。歩道が設置されているのだ。確かめたわけではないがこの休憩所はバスの停留所になっているのかも知れない。だとすれば横断歩道橋も必要となろう。

・メキシコの道路総延長は 2013 年末で約 379 千 km、うち高速道路は 2.42 %（約 9,170km）

・日本は 1,218 千 km、道路密度で比べると日本の約 1 ／ 17、うち高速道路 0.69 %（8,404km）

右下写真の道路（コステラ・デル・ゴルフォ自動車道）も高速道路とすれば、約 379 千 km のうち高速道路は 2.42 %（約 9,170km）は納得できる。

・人と物の輸送のためにまだまだ投資が必要と思われる。

(40) 天使の街・プエブラ　<プエブラ市庁舎及びロサリオ礼拝堂写真>

・プエブラ– Puebla –の中心地「プエブラ・デ・サラゴサ」は州都。プエブラ–トラスカラ都市圏の人口

2,921 千人。
・プエブラが「天使の街」と呼ばれるのは、メキシコバロックの最高傑作と言われるロサリオ礼拝堂内に、隅々まで天使像が配されていることに由来する。
・ロサリオ礼拝堂は、シンコ・デ・マーヨ（5月5日）通りに面して建つサントドミンゴ教会の翼廊部に設けられている。
・5月5日は、1862 年、プエブラの戦いで皇帝マクシミリアン率いるフランス軍にメキシコ軍が勝利した日（メキシコが唯一勝利した対外戦争)、プエブラ戦勝記念日として国の祝祭日になっている。

(41) コロニアル建築の宝庫・プエブラ　<砂糖菓子の家及び街並ほか写真>
・「プエブラ歴史地区」は、近郊にある「チョルーラの古代遺跡トラチアルテペトル」とともに世界遺産（文化遺産）に登録されている。
　チョルーラはアステカの時代のチョロリヤン、底辺の大きさではエジプトのピラミッドを凌ぐ大きさのピラミッドがあった一大祭祀センター。エルナン・コルテスは待ち伏せ攻撃を逆襲し、先住民を大虐殺した地。プエブラの建設にはチョロリヤンの建造物から建築資材を調達したのではと考えられる。
・プエブラは、メキシコ湾のベラクルスとメキシコシティを結ぶ交通の要衝にあって、ヌエバ・エスパーニャ時代の早くから植民都市として建設され、そのためコロニアル建築の宝庫となっている。

(42) タラベラ焼きの街・プエブラ　<お土産屋店内ほか写真>
・もともとチョルーラ付近は良質土が算出され、陶器作りが盛んであった。アステカ王モクテスマも食器としてチョルーラ産を愛用したという。
・ヌエバ・エスパーニャの時代、スペインのタラベラ焼きの技法をプエブラに持ち込み、メキシコのタラベラ焼きが始まった。
・その後、清国や日本などの技術が加わり、白地に青を基調とした華やかな陶器となって現在に至っている。
・街のあちこちがタラベラ焼きで飾られ、独得の雰囲気を醸し出している。
　右下はインターネット上にあったタラベラ焼きが敷き詰められた公園と思われる写真。是非見てみたかった。

(43) ユカタン半島　<ユカタン半島北部地図及びセノーテほか写真>
・メリダはユカタン州の州都。
・国際的リゾート都市カンクンはキンタナ・ロー州、同州のシアンカーンは「シアンカーン生物圏保護区」として世界自然遺跡に登録されている。
・スペインによるユカタン半島攻略は、カルロス 1 世からユカタンの総督に任命されたコンキスタドール、フランシスコ・モンテーホによって、1528 年に始まる。モンテーホはマヤ族の抵抗に会い、息子であるモンテーホ 2 世が後を継いでユカタン半島を征服し、1541 年にカンペチェ、翌年にはメリダを建設した。
・シケケン・セノーテ及びバジャドリに立ち寄っている。

(44) マヤ遺跡の入口・メリダ　<ユカタン州庁舎及びソカロのベンチほか写真>
・メキシコシティ－メリダ間の飛行時間は約 2 時間、メリダの空港（マヌエル・クレセンシオ・レホン国際空港）に到着したのは夜半。次の日、マヤの 3 遺跡を巡って夕方 6 時過ぎソカロに到着。メリダで目にしたのはほぼソカロだけ。
・夕方 6 時、ソカロは市民で溢れていた。メキシコの夕食は夜 8、9 時過ぎから（昼食は 2 時過ぎから)、ラテンアメリカ全体に共通するようだ。そのソカロにほぼカップル向けとしか思えないベンチが置かれていた。
・ユカタン州庁舎はコロニアル様式、 1 階の回廊が美しく、全体がライト・アップされていた。
・メリダには野口英世博士が足跡を残している。
・ソカロから 10 街区ほど北に、征服者の名に因むモンテーホ通りというのがある。19 世紀末から 20 世紀初頭に、エネケン・ロープで財を成したエネケン貴族と呼ばれるスペイン人が子息をパリに留学させ、帰国した彼等がパリのシャンゼリゼ通りを模して建設したという。

・19 世紀初頭メキシコがスペインの植民地から独立した後、農村では先住民への重税や酷使、土地をめぐる闘争が激化し、1847 年から数十年に及ぶ「カスタ（人種間）戦争」がユカタンの砂糖生産地帯で勃発、白人地主達はメリダに避難した。メリダで彼らは、マヤ人から竜舌蘭の一種エネケン（マヤ語：サッキ／SAC-KI）から取れる繊維が抗張力があり腐敗しにくいロープを作れることを知り、それを産業化した。エネケン・ロープは航海用として、あるいは米国での農業用に大きな需要を生みだし、彼らはエネケン貴族となった。

　宿泊したホテルはモンテーホ通りの最北端にあって、シャンゼリゼ通りを模したという道路を一度も通ることがなかった。なぜかクリオーリョはパリに憧れているよう。

・メリダからチチェン・イツァを経て、途中、セノーテ及びメキシコ政府観光局によって「プエブロ・マヒコ（魔法のように魅惑的な自治体）」の一つに選出されているバジャドリー Valladolido －に立ち寄った後、メキシコ・ツアーの最終地カンクンに向かった。

(END)　<メキシコ伝統舞踊の一つ、マリアッチ>
　　メキシコシティのレストラン「エル・ルガール・デル・マリアッチ」にて

Muchas Gracias

別紙１

メキシコの歴史

メキシコ		ヨーロッパ		アメリカ	
先スペイン期		1469	カステーリャ王国のイサベルとアラゴン連合王国のフェルナンドが結婚		
		1479	スペイン王国成立		
1492	～1504　コロンブスの航海（４回）スペイン、カリブ海を制覇	1492	ナスル朝滅亡	1497	カボット、北米海岸探検
		1494	トルデシャリス条約	1501	～1502 アメリゴ・ベスプッチ、南米探検
1513	バルボア(西)、太平洋に到達	516	カルロス１世就任（スペイン＝ハプスブルグ王朝）		
1517	黒人奴隷を西インド諸島に輸入				
1517	～1518 キューバ総督遠征隊派遣				
植民地時代（ヌエバ・エスパーニャ）					
1519	コルテス、メキシコ上陸				
1521	テノチティトランの崩壊				
1535	副王政府の樹立	1532	ピサロ、インカ帝国征服		
1545	ポトシ銀山採掘開始				
		1558	～1603 エリザベス１世（英国）		
		1568	～1648 オランダ独立戦争（対西）		
		1581	オランダ独立宣言		
		1588	無敵艦隊、英に敗れ制海権を失う		
1614	支倉常長－慶長遣欧使節団－メキシコ到着			1620	清教徒（メイフラワー号）プリマス上陸
		1700	スペイン＝ハプスブルグ家断絶フランス王ルイ１４世の孫、フェリペ５世就任（ブルボン王朝）	1776	アメリカ合衆国独立（米国）
1810	～1821　メキシコ独立戦争	1808	ブルボン王朝終焉		
1810	9/16 ミゲル・イダルゴ神父、「ドローレスの叫び」		ナポレオンの兄ジョゼフ、スペイン王となる		
独立国家時代		1813	ヨーロッパ解放戦争		
1821	「イグアラ計画」を副王が承認、副王政府解体				
1821	～1867　独立とカウディーヨ時代				
1829	ゲレーロ政権、黒人奴隷制を廃止				
				1836	テキサス共和国、独立を宣言
				1845	テキサス共和国を併合
1846	～1848 対米（米墨）戦争			1846	メキシコに宣戦布告
1847	～1901 カスタ（人種間）戦争				
1855	レフォルマの推進				
1861	ベニート・ファレス大統領就任				
1861	フランス干渉戦争、マクシミリアン皇帝就任			1861	～1865 南北戦争
1867	マクシミリアン皇帝、自由派軍に敗れ処刑	1868	～ 1871 スペイン王位継承をめぐる普仏戦争		
1877	メキシコ帝国崩壊、共和制復興ポリフィリオ・ディアス大統領就任、独裁へ				
1910	～1940　メキシコ革命	1936	～1939 スペイン内戦		
1940	～ 2000　制度的革命党（PRI）の一党独裁時代	1975	フアン・カルロス１世就任		
2000	PRI 一党独裁体制崩壊				

参考：ケンブリッジ版世界各国史「メキシコの歴史」Brian Hamnett・創土社、Wikipedia、ほか

別紙３

マヤの暦と数字

(1) マヤの３つの暦

マヤの暦には神聖暦（260日暦）のとハーブ（太陽暦に相当する365日暦)、及び長期暦等がある。

神聖暦である260日暦は20個の日の名前と13の数字が組み合わさった暦、ハーブ暦と呼ばれる365日暦は1ヶ月が20日の18ヶ月と5日だけの19番目の月が最後につく暦で両方が同時に使われていたという。

260日暦と365日暦は、その最小公倍数18,980日（5×52×73)、約52年で一巡し循環する。

ノーベル文学賞を受賞したメキシコの作家オクタビオ・パスの「孤独の迷路」には次のような記述がある。

「メソアメリカの世界がスペイン人に対して示した態度を理解するためには次のことを思い出す必要がある。伝説によれば、王で僧侶であるトピルツィン・ケツアルコアトルはアカトゥル（葦）元年に生まれ、また、彼の逃亡は52年後の再びアカトゥル元年であった。一般にケツアルコアトルはアカトゥル元年に帰ってくる。コルテスがメキシコにやってきたのが1519年、つまり正しくアカトゥル元年であった」。

つまり、スペイン人にとって征服は偉業であったが、インディオにとってそれは儀式（宇宙的破局の人間的表現）であったと。

(2) 長期暦

今から10年ほど前、マヤ・アステカの預言により2012年に地球が破局を迎えるとまことしやかに流布されたことがあった。ジョン・キューザック主演の「２０１２」というハリウッド映画さえ創られている。ノストラダムの預言など西欧人はこの手の話を信じる人が多いのだろうか。

2012年問題はマヤ暦の長期暦から派生している。

マヤの数字は長期暦と直結し、５つの時の単位（キン、ウィナル、トゥン、カトゥン、バクトゥン）から成り立っている。すなわち

・キン　　：１日
・ウィナル　：20日＝20キン
・トゥン　　：360日＝18ウィナル
・カトゥン　：7,200日＝20トゥン
・バクトゥン：144,000日＝20 カトゥン

そしてマヤの世界観上最も重要な天上界を司る13の神々により13バクトゥンで一巡する。

すなわち長期暦は13×144,000日＝1,872,000日、約5125年余りで一巡する循環暦で、2012年12月23日はその長期暦の区切りの日に当たる。

破局ではなく言わば我々は新たな長期暦の元日を迎えることが出来た、幸運な人間であると言っていいのかも知れない。その暦元は紀元前3114年8月13日に始まる。

マヤ暦の解明にとどまらずマヤ文明の研究に生涯を懸けた、イギリス人の歴史家J. エリック S. シンプソンらによって長期暦の研究が進められ、暦元が明らかにされた。

「マヤ文明を知る事典」では暦元を紀元前3114年8月11日とし、長期暦の区切りの日を2012年12月21日としている。

マヤの暦は各地の遺跡に、王の在任や出生、死亡の年月を記す石碑として残されている。暦は中国がそうであったように支配のツールとして権力者が独占していたであろうことは想像に難くない。太陽や月、星々の運行とマヤの文字、数字に精通していなければ、石碑として残しそれを理解することはとても出来ることではない。

チチェン・イツァの入場口でガイド氏の勧めで購入したリーフレット「EL CALENDARIO MAYA」に、

マヤの暦の表記法が示されている。

重要なのは、右図の2.で示されている人類が月に到達した1969年7月20日が＜12.17.15.16.18＞とバクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナル、キンを順に記した数列によって記され、それがマヤの暦と現在我々が使う暦とを関連付けられるということである。

すなわち1969年7月20日は、暦元から

12バクトゥン　12×144,000＝1,728,000
17カトゥン　17×7200＝122,400
15トゥン　15×360＝5,400
16ウィナル　16×20＝320
18キン　18×1＝18

の合計1,856,138日目になる。

この1,856,138日目が正しいのかどうか少し気になる。この日数を365あるいは365.25で割り返してみても紀元前3114年にならない。

インターネット上の計算サイト（keisan.casio.jp）では1,856,164日という計算結果となり、26日の差がある。

この計算サイトでは「西暦は1582年10月4日まではユリウス暦、次の日（10月15日）からはグレゴリオ暦を使用しています。」としており、一方、ガイド氏の説明では1582年11月12日が変化日としているので、ここで差がでているのだろう。

現代マヤしゃかいではもはや長期暦は使われていないものの、観光資源としては価値があるだろう。

CECIJEMAマヤカレンダー

以上、マヤ暦の一番重要な要素の説明をもとにして、グレゴリオ暦の日付、例えば人類が月に到達した1969年7月20日は、マヤの表記法では、次のように表すことができます。

1. *Alautun*または導入部の象形文字:絶対年譜の日付が書いてあることを示します。太陽暦あるいはハーブの月を表す守護神の文字、この場合は*Tzec*の神が示されています。
2. 次の5組の絵は左から右、上から下に向かって読みます。絶対年譜の時代に当たるものです。
a) 12 ***Baktun***　b) 17 ***Katun***　c) 15 ***Tun***　d) 16 ***Uinal***　e) 18 ***Kin***
簡単に書くと12.17.15.16.18です。
3. この一組の文字はツォルキンまたは聖暦によれば***Etznab2***日です。
4. この一組の文字はハーブまたは太陽暦の***16Tzec***月にあたります。
5. 最後に8番目の絵は月齢と月の位置を示します。この場合は上弦の月で6日です。

(3) 神聖暦

260日暦は20個の日の名前と13の数字が組み合わされた宗教目的で使われる神聖暦であり、現在でもマヤでは使われている。

マヤの数学が手足の全ての指を使う20進法であるように、20という数はマヤ人にとってはスピリチャルな数字である。そして13は天上界、地下界の階層を示す重要な数字であり、エネルギーの強さを示すとされる。

右図は20日の象形文字ととその呼び名で、それぞれに意味と解釈がある。20の呼び名は13の数字と組み合わされて歯車のように、例えていえば日本の十干十二支と同じように循環する。一のイミッシュ、二のイック、三のアクバルと続き、十三のベンの次

の日は一のイシュとなって、260日で一巡する。

上述の日の象形文字と呼び名はユカタン半島低地北部に住むマヤが使用しているもので、グアテマラなどでは異なっている。

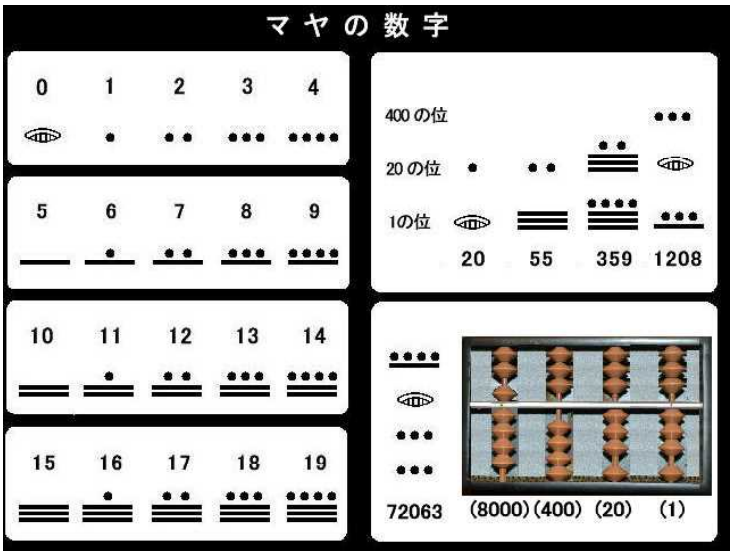
(4) ハーブ

365日暦は1ヶ月が20日の18ヶ月と5日だけの19番目の月が最後につく太陽暦で、ハーブと呼ばれる。グレゴリオ暦の使用により今日ではその重要性は失われている。

(5) マヤの数字

マヤ文字は縦書きで表される。数字も漢数字と同じように縦書きである。

マヤの数字は丸い点と棒状の線で表され、手の指だけでなく足の指も使う20進法（下図参照）。



一桁目では丸い点は１個が１を表し４個まで、棒状の線一本が５を表し３本まで。４個の点と３本の線で19までが表され、20は桁上がりする。

二桁目は一桁目の上段に記され、20は丸い点１個と一桁目に零を表す貝のマークがつく。

マヤには紀元前、既に零の概念があった。

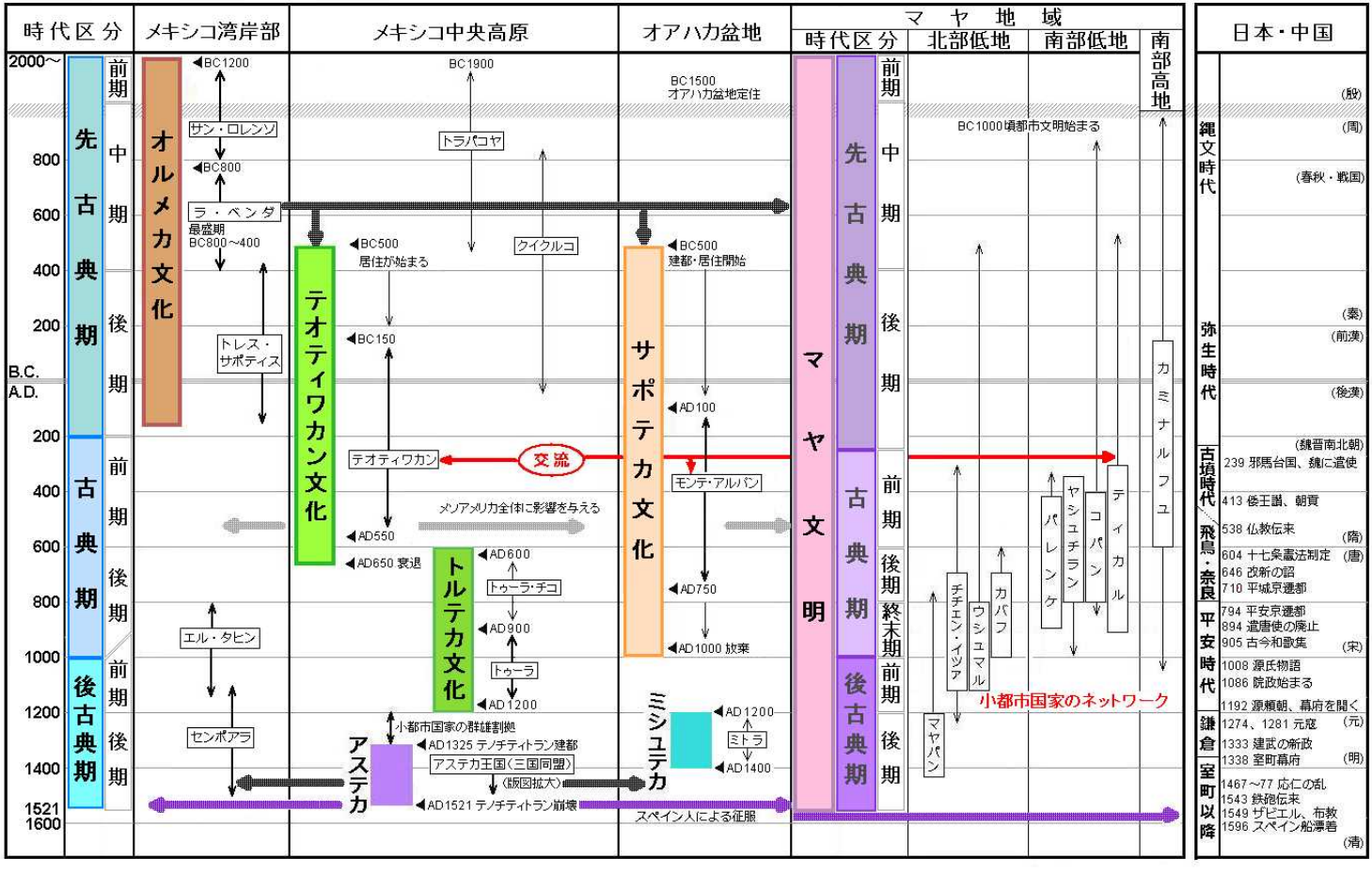
マヤ数字の表現方法は算盤と同じではないかと気がついた。天珠が３個、地珠が４個の算盤をイメージすると分かりやすい。

因みにWikipediaで「算盤」の項を見てみると「1000年ごろにはアステカにもそろばん状のものが存在していた。珠にとうもろこしの芯が使われ、紐に通していたと考えられている。」とあるが出典が明示されておらず、また1000年にはまだアステカ帝国は成立していない。

二桁目は丸い点１個が20、棒状の線一本が100、二桁目までで表示できるのは、二桁目の丸い点4個と棒状の線3本（380）及び一桁目の丸い点4個と棒状の線3本（19）の合計399まで。400は桁上がりして二桁目の上に丸い点１個と二桁目、一桁目にそれぞれ零を表す貝のマークがつく。

マヤの数字を暦として使う場合、二桁目は359で終わり、三桁目の丸い点１個が360、すなわちほぼ一年を表す。

マヤの数字は、主に王の即位、死亡の月日を碑文に表すのに使われ、遺跡の年代を確定する重要な手がかりとなっている。

別紙２

メソアメリカ古代文明表